

「ハレとケ」通信

第30号

「非日常」と「日常」の、日本の風情のかたちを楽しむ暮らしをご提案する季刊誌です

建設に携わることの幸せを、おすそわけ。

物語のある建築（30）

「—ただ誠実に、大好きな写真と共に。—

スタジオ仁

倉庫兼社宅新築工事

中津万象園【三社詣り】

平成31年夏 発行
剣山山頂付近より（日の出前）

「一ただ誠実に、大好きな写真と共に。」

スタジオ仁 倉庫兼社宅新築工事

今回、私達が担当した建築は、スタジオ仁さんの倉庫と社宅部分。

丸亀市にある、写真スタジオ「スタジオ仁」の高岡仁さん。会社行事のたびに写真を撮りに来てくださる高岡さんは、あります。私がとつて单なる「いつもの写真屋さん」でなくなつたのは、3年ほど前、証明写真を撮りに行つた時のことでした。

ただでさえも写真の嫌いなわたしは、必要に迫られて気が進まないまま仕方なくスタジオを訪れたのですが、撮影の最後、「ちょっと笑つて。ニコツとしてみて！」と言われたのです。

「なんでそんなことをするんかなあ。証明写真やのに。」

でも、後日納品されたデータを見たとき、その理由がわかりました。

むつりとまじめな顔の証明写真の後に、笑顔の写真。「笑顔って、こんなにも力があるんだ！」。どれも自分の顔ではあるけれど、笑顔の力にちょっとびっくりしたのです。

「こういったサービスができる写真屋さんって、素敵だな」。今回の物語のある建築は、そんな素敵な『スタジオ仁』さんの物語です。



スタジオ仁 高岡仁さん

「中讃で小学校や中学校の卒業アルバムを請け負っているのが13校、観音寺市の幼稚園など、今撮影している学校は行事スポットのみのも含めると20校くらいあります。」と笑う高岡さんですが、入学した子供たちが卒業するまで、いろんな行事を経て成長していくのを傍で追いかけて、撮影し、アルバムにまとめていく学校の撮影は、数年前に大き

ます。

「中讃で小学校や中学校の卒業アルバムを請け負っているのが13校、観音寺市の幼稚園など、今撮影している学校は行事スポットのみのも含めると20校くらいあります。」と笑う高岡さんですが、入学した子供たちが卒業するまで、いろんな行事を経て成



↑びっしりと積み重ねられた段ボ

な手術を経験した高岡さんにとって決して『楽な仕事』ではないそう。それでも「体力が続く限りは…」と辞めないのは、子どもたちの入学から卒業までという一連の流れを途中で断ち切ることは難しいこと、そして、そのどれもがスタジオ仁を指名してくださいさつたお仕事ばかりだからなのだとあります。

「いちばん最初に学校のアルバムをやり始めたのは昭和55年の城西小学校。そこでお世話になった先生が別の学校

に異動されて、そしてその先生から異動先での撮影依頼をいただく。積極的に営業していないのに、くださった仕事だからこそ、辞められない」。

そんなお仕事の一方で、もうひとり、スタジオ仁さんを代表する仕事があります。それは、30年を超えて続けてきた、金刀比羅宮の撮影の仕事です。

取り出してきてくれた『金刀比羅宮の名宝』『冷泉為恭とその周辺』などの豪華本（金刀比羅宮の所蔵する宝物や

建物を隈なく撮った定価1万円を超える本）には、ページを開くと、【撮影／スタジオ仁】というクレジットがありました。

「こんな撮影も（）なすことができたのは、今井イサオ先生のお陰…。」

博報堂でも活躍したという、今井イサオさんのスタジオ【フォトエクボ（横浜）】でのアシスタント時代に、商業写真としての照明の使い方や、ポーズのつけ方を教わったことが、今の基盤とな

つていると、高岡さんは言います。

「今井イサオ先生、御弟様の寛先生、共にお亡くなりになつて二十数年経ちますが、奥さま、御子息御夫妻には、まだに往き来があります。

昭和50年代初めの修行時代の4月下旬、ゼネストで電車が止まるといふタジオから徒歩数分の私のアパートで、皆、合宿していました。観音寺の実家

から届く米を炊き、私が漬けた漬物と味噌汁の朝食付きです。そういったこともあり、今も大分・香川・厚木間をいとも簡単に行ったり来たりしています。」

いつかこのひでいる高岡さんは、いろんな時代がありそうです。

* * * * *

スタジオ仁の代表、高岡仁さんは、昭和25年生まれ。観音寺の農家の8人兄弟の末っ子として生まれました。

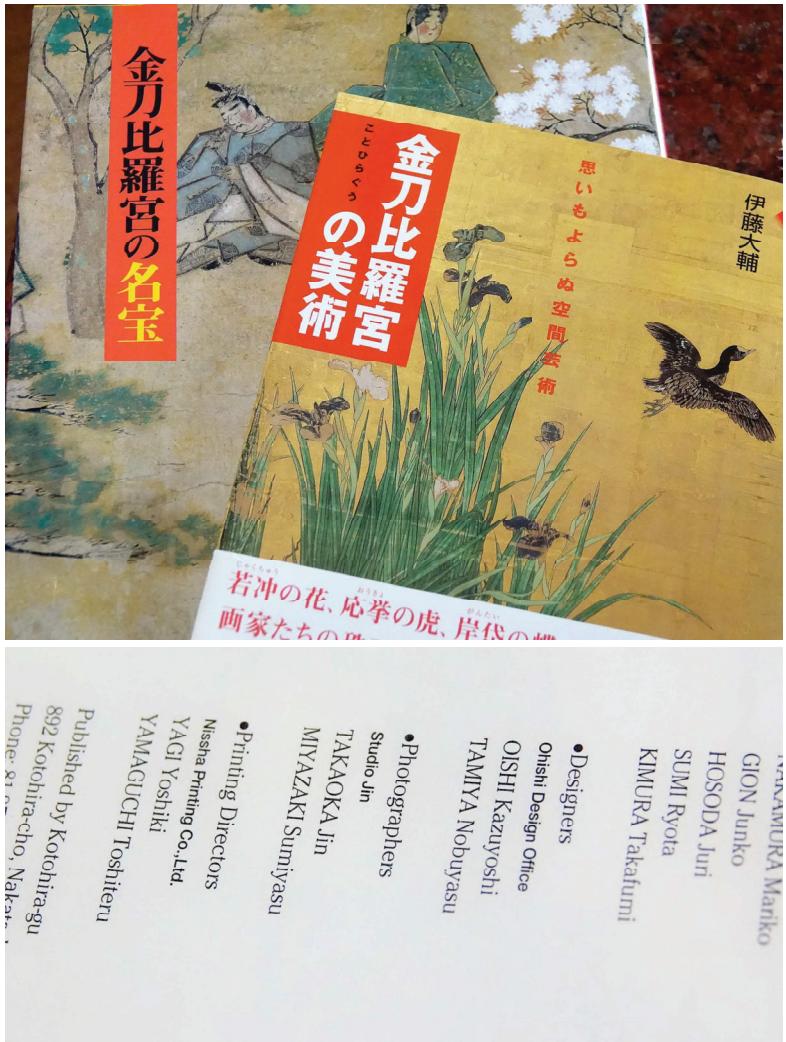
子供のころから野球が好きで、観音寺商業高等学校へ入

学し野球部に入りましたが、事情により1年生で退部。今度は野球の試合の様子や応援の姿を写真に収めることで野球に関わりたいと写真部へ入ったのが、カメラとの出会いでした。

でも、写真部に入ったものの、写真のことは何も知らない。そこで、「これでは後輩に教えてあげる」ともできない」と、近くの写真館へ手伝いに行きはじめた：というのですから、いかにも誠実な高岡さんらしいところです。

そして、高岡さんの働きぶりを信頼した店主から「卒業後はうちで働くかな」と声をかけられ、高校卒業後、その写真館へ就職。休みなしに朝9時から夜10時までの業務をこなし、「写真屋とはそういうものなんだ」と思うようになつたのだとか。

しかし、5～6年経つたころに、「もう少し専門的なスタジオで写真を勉強したい」という想いになつたという高岡さん。出入りしていた富士フィルムの営業の人胸の内を打ち明け、紹介されたのが横浜の株式会社フォト・エクボで、今井イサオさんのもと、全国の写真館から集まつてきたいわゆる“跡継ぎ息子”たちと共に経験を積んでいき



↑『金刀比羅宮の名宝』。Photographersに「TAKAOKA Jin」のクレジットが。(連名だが一枚を除きすべて高岡さんによる写真)

金刀比羅宮の名宝

金刀比羅宮の美術

若冲の花、応挙の虎、岸岱の山
画家たちの

伊藤大輔
GION Junko
HOSODA Juri
SUMI Ryota
KIMURA Takafumi

•Designers
Ohishi Design Office
OISHI Kazuyoshi
TAMIA Nobuyasu

•Photographers
Studio Jin
TAKAOKA Jin
MIYAZAKI Sumiyasu

Printing Directors
Nissha Printing Co.,Ltd.
YAGI Yoshiki
YAMAGUCHI Toshiteru
Published by Kotohiragu
892 Kotohiracho, Nakano,
Phone: 81-3-

ます。

ただし、修行なのでもちろん給料と
いたものはほとんどなく、しかも夏枯
れといって写真館は7～8月は仕事が
ない。日ごろは14、15人いるスタジオ
も、夏には2、3人で十分ということに
なってしまいます。マックスファクター



等、世界を代表するブランドのコマーシ
ヤル・フォト撮影をする今井さんの助手
として傍らで学びながら、コマーシャル
写真ならではの照明の使い方を覚える
一方、「これでは暮らしていけない」の
も事実だったそうで、夏には大型トラ
ックの免許を取つて運送のバイトもして

いたそうです。
「その当時、東京は大型トラックの
出入りを規制していたから、観音寺を
夜出て朝早くに東京へ着く。そして朝
のうちにトンボ返りで東京を出る…と
いた状況だつたんですよ」。

そして、ついに27歳で独立。故郷の
観音寺へ帰り、ワゴン車に機材を積ん
で、まずは地元の幼稚園の撮影などか
ら業務を開始します。でも、ちゃんと
仕事をしたいなら、スタジオは必須。
ではそれを、どこに置くのか。地元の觀
音寺か、それとも…?

考えた結果、選んだのは丸亀。

「觀音寺にいれば知人からの紹介で
仕事はあるけれど、それ以上の市場が
ない。」という想いから、丸亀市城西地
区に借家を見つけ、昭和53年11月、
いよいよスタジオを開設します。でも、
やはり最初から仕事はない。結局、丸
亀に開業したものの、仕事をくださる
のは觀音寺のお客様ばかりで、一日に
丸亀・觀音寺間を何往復もする…とい
う状態だつたそうです。

「数少ない丸亀でのクライアントが、
セーラー広告さん。当時、新聞折込広



広告さんの営業をされていたのが、元
参議院議員の山内俊夫さん。その山内
さんがスポンサーになつてくださり、丸
亀JC（丸亀青年会議所）にも入会、そ
れが丸亀での『はじめの一歩』と言えま
すね」。

軌道に乗り始めた…と見えますが、
実は同じ頃、もう一つ大変なことがあ
った、という高岡さん。

「学生の頃からお世話になつていた写
真館さんから、『不渡りを出しそだ
から助けてほしい、お金を貸してくれ
ないか』と連絡が来たんです。信頼して
お世話になつた人の頼みだから、どう
にかしてあげたい」。

そうは言つても、開業したばかりの
高岡さんに、余分な貯金があるわけは
ありません。

「親戚中から借金をしてでも…と思
い走り回りましたが、ある叔父に、『仁、
私はお前がどうしてもというなら金を
貸してやりたいと思う。だけど、お前
がそんなに必死で金を調達したとして
も、それはきっと返つてこないと思うぞ。
それでもええんか?』と言われたんで

す。
返つてこないだろう、と叔父は言う。

でも、もし叔父から借りるなら、自分はそれを返さなければいけない。どうするのか。—迷いましたが、お世話になつた人が困つていてるんだから『それでいい、貸してほしい』と借りました。

結果的には叔父の言う通り、そのお金は返つてこなかつた。他にもたくさん借錢があつて、計画的に追い銭の形で私から借りていつたお金だつたようなんです」。

何度も開かれる債権者集会に行つたものの、結局一円も返つてこなかつた、という高岡さん。それでも、貸してくれた叔父には、毎月返済をします。

「毎月、妻と一緒にお金を返しに叔父を訪ねるんです。当時の私は知らなかつたけれど、それを叔父はきつちりと帳面につけていて、『仁は間違いのない信頼できる男だ』と書き残していくくれた。その叔父の言葉が、なんと、巡り巡つてのちに私がスタジオを新築するときの『信用』になつたんです。」

実績があつたのは当然ですが、大きかつたのがその叔父の言葉を見た方からの推薦だったのだそうです。

「それを聞いた時、私の母が『仁、お世話になつた人に騙されたことは辛かっただろうし、借金を背負うことは大変だつただろう。でも、それがあったからこそ、今の仁の信用があるんやで。そのことに感謝せないかん』と言つたんです。

私が今、人間関係を大事にしないといけないと考えるのは、母の影響なんでしょう。母はそういう人でした」。

そしてその頃、高岡さんの仕事は多

忙を極めます。

「この仕事に携わつていて幸せなことのひとつは、普通に生活していればお目に掛かれないような方にも、レンズを挟んで向き合えること。

40年前、今井イサオ先生から開業祝にいただいた皮製の帆船は、現在もスタジオの棚の上で私を見守つてくれていますが、肖像写真については、その先生の許で、女性のポージング、とくに

“手の扱い”をどのようにすれば美しく撮れるかをお教えいただきました。

でも、就寝中以外はすべて仕事です。

山北へ移つて間もないころ、当時、ラボネットワーク(フジカラー系)高松営業所長でいらした、今は亡き観商の先輩

に『長女が3歳になつたばかり、定休日が設けられないのが辛い』と申しましてところ、「商売は24時間365日、年中無休!』と一言。その言葉は、いつも心にあります。

また、前述の金刀比羅宮さんの写真集の撮影もさせていただいたわけですが、普通、建物の統き間の大空間を撮らうと思うと、どこかに影ができてしまます。それを影が出ないように照明を考え、全ての部屋、襖絵が美しく



上・中/子供の写真を撮るとき、目線を向けてもらうための小道具。

創業時から使っている定番。

下/レンズが蛇腹で収納されるカメラ。昔のものだそうですが、

今見ても合理的で新鮮です。

出るよう撮影するには経験と熟練が必要です。そして、一点一点の宝物をその細部まで鮮明に撮影するのは、実は大変なこと。一見綺麗に見えても、写真に撮った時にのっぺりと質感がなくなってしまうのでは、商業写真としてはまったく使えません。

特に『冷泉為恭とその周辺』の本のはうは絵巻物が多くたから、傷つけずスムーズに撮影するには器具の工夫も必要で、長い作品を開いては巻き取りながら真上から撮影するために、オリジナルのレールを作つたりもしました。

うちのスタッフがたいへん器用で、必要とあらばホームセンターで材料調達してきて何でも作つてしまふ(笑)。結局1冊作るのに2年くらいは撮影にかけています」。

「保管しなくてはならないもの」を保冷車のコンテナ部分を改造して駐車場に置いていました。

そんな様々な思い出のある山北町のスタジオですが、前面道路の拡幅工事により、やむを得ず、平成11年、現在の場所(柞原町)へ移転。スタジオの建設後、倉庫として増築されたのが今回の建物です。

「山北では敷地が50坪ほどしかなく、営業年数が増すにつれ増えつづける

最後に、高岡さんに「これからしたい設計は親しくお付き合いいただけておりります富士建設さんです。」



↑金刀比羅宮撮影当時は、2枚ずつしか撮れないポジ。失敗できない。

「夢はなんでしょう?」と聞いてみると…。

「私は今までに学校アルバムやスタジオでの家族写真や美術品の撮影やいろんなことをやってきたけれど、どの撮影の仕事も全部好き。とにかく写真撮影をすること自体が大好きなんです。これからもご縁をいただいた方、お世話になつた方とのお付き合いは何よりも大切に、撮影を続けていきたいですね。」と高岡さん。

富士建設が建てたのは、決して大



【物語のある建築30】了)
『物語のある建築』です。

きくはない建物です。でも、「いつもどんなときも、精一杯やつてきた。ただそれだけ」。そう言っていつも笑顔を見せる高岡さんの、人生が詰まっているんだ。

— そう心から誇りに思つた、今回の『物語のある建築』です。

【中津万象園 三社詣り】

丸亀京極藩の代々の藩主に愛された庭として知られる中津万象園。

実はその園内には、伏見稻荷から分祀された「稻荷社」、竹生島から分祀された「弁財天」、そして古くから地元で信仰を集めたという「石投げ地蔵」の3つの【パワースポット】があるのをご存知でしょうか?

○稻荷社の由来

鳥居の奉納といえば京都の伏見稻荷の千本鳥居が有名ですが、願い事が「通る」或いは「通った」御礼の意味から、鳥居を奉納する習慣が江戸時代以降に広がつた…と言われています。

中津万象園にあるのは、五穀豊穣、商売繁昌、家内安全、諸願成就の神として全国で広く信仰されている、伏見稻荷より勧請した【稻荷社】。

園内の稻荷社のはじまりは定かではありませんが、今の東京都品川区にある丸亀京極藩の下屋敷(「戸越屋敷」)。寛文六年(一六六六)、二代藩主京極高豊の頃)にも、その地にあつた豊受神をご神体とする稻荷社を庭園内に鬼

門除けとして取り入れ祀っている」とから、この中津の地でも同じような経緯があつたのでしょうか。

この稻荷社は、同じく園内に存する「弁財天」「金の神」「石投げ地蔵」と共に京極の時代から信仰を集めたと言われていますが、時代の流れと共に荒廃。それを、昭和57年の中津万象園の一般公開に合わせて地元の有志の皆さまが復元、今に到るまで守り続けられています。

宮島と並ぶ「日本三弁財天」の一つで、その中で最も古い弁財天。そのため、「大」の字をつけ、大弁財天と称されていますが、中津万象園の弁才天は、その竹生島からやってきたとされています。(京極家が近江ゆかりであつたことから)

○弁財天の由来

竹生島にある宝嚴寺の本尊である大弁財天は、江ノ島・宮島と共に



今も毎月24日の縁日には、大勢のひとが御経を上げに集まる、靈験あらたかな地蔵尊です。

特に、8月24日は、年に一度の例大祭。幸運を願つて、訪れてみませんか。

縁の木々に映える真っ赤な鳥居は、園内有数の人気撮影スポットです。

お隣には【金の神】もありますので、お詣りを忘れずに!

○石投げ地蔵の由来

そして、ちょっとおもしろいお詣りの仕方をするのは、園の北側にある【石投げ地蔵】です。もともとは海辺にあつた地蔵尊だったのが、大名庭園の中に採り入れられ、お詣りできなくなつた住民が、石に願いごとを書いて投げ入れるようになったのが始まりといわれています。



は、どちらでしょうか?!

中津万象園を愛した京極のお殿さま、高朗公の漢詩集

「琴峰詩抄」に親しむ（4）

丸亀をよなく愛した京極家六代目藩主 高朗公（号を琴峰と称する。1798-1874）の漢詩集【琴峰詩抄】より、詩をお届けいたします。

旅の途中で、また領内あちこちで、詩の題材を発見して歩いた“琴峰さん”。このお殿さまは漢詩を趣味とし、生涯に一万首にも及ぶ詩を詠んだといわれていますが、日々の喜びや出来事などを丁寧に詠つた詩の数々は、まるでお殿さまの体温が伝わってくるようで、知れば知るほどあたたかい気持ちになってしまいます。その中から、まずは8回にわたって、お城から中津万象園へ至る道の情景を詠んだ漢詩を紹介します。

中津途中（巻一）

趁^レ涼單服出^レ城闈[。] 路轉晴沙野岸濱。
竹落松村多接^レ境[。] 漁家艤戸互成^レ鄰[。]
磯頭擡^レ首窺魚鷺[。] 橋下放^レ舟垂釣人。
品^レ水評^レ山詩未^レ就[。] 苦吟行側^レ碧紗巾[。]

涼しきうちに、單衣の服を着て城を出る。

天気が良くなつてきて、

細かな砂の浜辺はよく晴れている。

竹や切り倒された松が多く村の境界に接していて、

戸に塩のぶいた漁師の家が並んでいる。

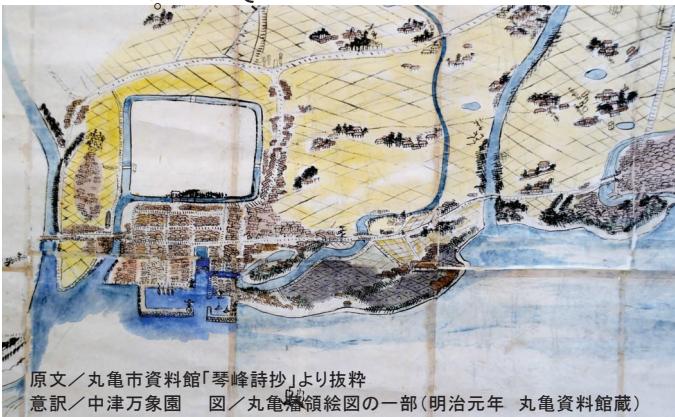
海には波頭がたち、鷺は魚を狙い、

橋の下では舟が放たれ、釣り人が糸を垂れている。

水を品定めし、山を評してみるが

詩はまだできない。

緑の薄綿で取り囲まれたような景色の中を



原文／丸亀市資料館「琴峰詩抄」より抜粋
意訳／中津万象園 図／丸亀藩領絵図の一部(明治元年 丸亀資料館蔵)

【編集後記】今回もまた、スタジオ仁さまの【物語のある建築】のインタビューより、発行が一年近く遅れてしましました。高岡さまには本当に申し訳ないこととなりました。どうぞお許しください。

さて、先般、ある工場新築のプロジェクト（設計施工一括方式）に参加する機会がありました。結果は、『次点』。「富士の提案が一番良かった」という評もいただいたものの、価格で負けてしまったわけで、結果が全てという意味では言い訳のしようもありません。結果お礼、そしてこれから先の変わらぬご支援のお願いへ行きながら、ふと考えたことがあります。

建設業と言るのは、主に元請会社がお客様と接する役目で、元請より発注されて仕事をする各専門業者はBtoBが基本です。ですが、今回のコンペでは、弊社の設計企画や営業担当者は、意匠・構造・設備の設計事務所や各専門業者を「プリッジング」する役割を担い、自社以外のプロフェッショナルの知恵とアイデアを引き出し、お客様にとってより良い提案にまとめしていくことを心がけました。

それは「自社だけのベストではなく、チームの総力で戦う」扇の要を目指す弊社にとって自然なことでしたが、専門業者にとって、「チームの一員として、お客様のことを意識し、「自分がプロジェクトの行方を握っている」プレッシャーを自分事として感じた、という意味で、かなりエポックメイキングなことだったのではないか、と思うのです。

それにより、専門業者も弊社も、『徹底的な顧客視点』に立つことができた、と思っています。そう考えると、負けてしまったけれど、今回の戦いかたはきっと正しかつたと感じるのです。但し、そのぶん、弊社も専門業者も、自分の出した数字や結果に対する本気度の問われかたは厳しくなり、責任の度合いも増すのではありますか…。」この戦い方を、磨いていきたいと考えています。

【発行者紹介】富士建設株式会社は、現存する五重塔55基のうち2基を建立し、「建築は文化なり」を理念に掲げて、官公庁建物・各種施設等大型建築物をはじめ、数寄屋風住宅、デザイン住宅、リフォームまで幅広く施工している。

また、県下において1300区画超の宅地開発・分譲の実績を持ち、「街づくり」に対する貢献には定評がある。なお、丸亀市指定名勝である「中津万象園」の修復維持保全活動も行っている。

■営業所：高松営業所・丸亀本店・観音寺営業所

■中津万象園・丸亀美術館／丸亀プラザホテル／味処 懐風亭



建設業許可：香川県知事許可(特28)第139号
／一級建築士事務所：香川県知事登録 第416号／宅地建物取引業免許：香川県知事登録(10)第1997号

富士建設株式会社

本社：〒769-1101 三豊市詫間町詫間300番地1
TEL0875-83-2588(0120-832589)

FAX0875-83-5864

<http://www.fujikensetsu.jp>

mail y-manabe@fujikensetsu.jp (真鍋有紀子)